東京外国語大学若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（非英語圏ヨーロッパ諸国）（TUFS-ITP-EUROPA）派遣報告書

氏名

石田聖子（東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程）

派遣先機関

ボローニャ大学（イタリア）

受入教員

ジャコモ・マンゾリ教授

派遣期間

2010 年 9 月 1 日～2011 年 8 月 5 日

研究テーマ

20 世紀イタリア文化表象における笑いに関する考察

研究の概要

20 世紀は笑いが新たな意義を獲得して浮上してきた世紀である。そうした観点のもとに発する本研究は、20 世紀イタリア文化にみられる笑いに関わる表象の考察を通じて 20 世紀に称揚された笑いの特質とその意義を指摘することを目的とする。主な考察の対象となるのは、20 世紀イタリアで活躍した三人の作家、アルド・パラッツェスキ（Aldo Palazzeschi, 1885-1974 年）、アキッレ・カンパニーレ（Achille Campanile, 1899-1977 年）、チェーザレ・ザヴァッティーニ（Cesare Zavattini, 1902-1989 年）である。

論文の第一章ではまず、笑い理論の変遷を古代より通時的に追うことで、20 世紀的笑い考察のための予備的分析を試みる。現象としての笑いの発現形態に関しては現在までに注目すべき変化は報告されていない一方で、その社会的意義、概念、それをめぐる理論といった側面においては時代による変化が認められる。笑いを理論化する試みは古代より継続して行われてきたが、当初、関心は専ら「何が笑わせるのか」といった笑いを喚起する対象の性質をめぐるものであった。しかし、20 世紀に至り、笑いは専ら主体の認識の在り方やレベルを反映するものとして捉えられるようになり、理論の面でも、それまでに提出された理論を包括する新たな理論が求められるようになった。

つづく第二章では、まず、パラッツェスキの初期詩作品（1905-1909 年）考察を通じて 20 世紀的主体が笑いを獲得するに至る経緯を確認した後に、未来派宣言「反苦悩」

（*Controdolore*、1914 年）を分析して 20 世紀に特徴的な笑いの一典型の特性を抽出し、次いで、それら特性を踏まえて未来派小説『ペレラの法典』（*Il Codice di Perelà*、1911 年）の考察をおこなう。パラッツェスキは笑いに、アリストテレス以前の笑いが担っていた破壊し創造する力を見出し、そのダイナミズムを応用することで、20 世紀初頭の文化風潮にひとつの突破口を開くことを試みたと考える。そうした先駆的な役割を果たすに際し、パラッツェスキが専ら拠ったのは想像力であり、その発動をもって人間の有限性の超克が目指された。

パラッツェスキによって想像された 20 世紀的笑いはカンパニーレにより実践され、理論化される。カンパニーレの小説『この愛って一体？』（*Ma che cosa è quest'amore?*、1927 年）の分析を中心に展開する第三章では、笑いを支える論理であり、カンパニーレ作品理解のためのキー概念である「逆説」をめぐり考察する。知的に笑いを量産するカンパニーレの物語手法は映画の手法と構造に対比しうる。従って、＜モンタージュ＞、＜視点＞、＜言語＞をキーワードにその手法を分析し、同時に、映画が本質的に笑いと基盤を共有する芸術形態であることを示す。そんなカンパニーレの笑いは“イロニー”と呼ばれる。イロニーは 20 世紀的スペクタクルを考えるに根本的な概念であることから、カンパニーレのイロニックな側面の確認は、同作家があらゆるメディアを横断しつつ表現する先駆的な作家となりえた事実ばかりでなく、特に、そのテレビ評論家としての活動を評価するためにも肝要となる。

最終章となる第四章では、ザヴァッティーニとその作品が考察の中心となる。カンパニーレが知的に笑いを繰り出す手法を編み出したとすれば、ザヴァッティーニはその知を感情と統合することで笑いの別次元へのアプローチを試みる。同章ではまず、ザヴァッティーニとカンパニーレの反発的で親和的な関係を考察した後、その初期小説三作品『わたしについて大いに語ろう』（*Parliamo tanto di me*、1931 年）、『貧乏人は狂っている』（*I poveri sono matti*、1937 年）、『わたしは悪魔だ』（*Io sono il diavolo*、1941 年）、及び、ザヴァッティーニが脚本を担当した映画作品『ミラノの奇蹟』（*Miracolo a Milano*、1951 年）を対象とし、笑いの数ある側面のなかでも 20 世紀に特に注目された“ユーモア”をめぐり考察をおこなう。別の認識レベルへと跳躍を果たす契機としてのユーモアこそは、ザヴァッティーニの多彩な活動の原動力となるとともに、様々な現実レベルが混在する表象の数々を育んだと考える。

以上の具体的表象の考察からは、現実概念の再考を迫られた 20 世紀において、笑いは、目的として追究されるのではなく、知覚、認識レベルの深化が実現される過程に付随して生じるものであることが明らかとなる。

<u>具体的成果</u>

今派遣に際しては、派遣先大学に籍を置き、ボローニャ大学との共同学位授与制度に則った活動を行うことを専らの目的としたが、実際に、博士論文作成作業を実施したことが

この度の派遣における第一の成果として挙げられる。現在、博士論文の執筆は順調に進行しており、来春の提出に向けて、7割程度の執筆が完了している。論文執筆作業に並行しては、補遺とする予定の資料の収集と整理、参考文献表の作成も行っており、現在のペースを保持するならば、期限内の完成は充分に可能であると考える。なお、指導教員との関係もますます良好で、指導状況も順調である。

その他の成果としては、資料調査と収集、派遣先大学の講義や博士課程ゼミ、各種シンポジウムへの参加、現地研究者との意見交換が挙げられる。特に、博士課程ゼミを通じて得たニューメディアに関する知見は、派遣者の研究に新たな視角を与えてくれることとなり大変印象的であった。また、映像資料の収集、視聴は特に手続き等に時間と手間を要するケースが多く、現地に居住していることが有利に働いていたことが少なからずあった。加えて、関連テーマを掲げる映画祭への参加も積極的に行い、貴重なフィルムの数々を映画館にて視聴するばかりでなく、関心を共有する研究者との交流もおこなえ、派遣者の研究活動にとり有意義な経験となった。

一方、今期間中におこなった研究発表に関しては、論文「笑う＜わたし＞－チェーザレ・ザヴァッティーニの初期文学作品における＜わたし＞」を本事業の一環として『笑いと創造（第六集）』（ハワード・ヒベット、文学と笑い研究会編、勉誠出版、2010年）に発表したほか、ITP-EUROPAの主宰で、2010年12月9日、10日にボローニャ大学にて開催された第一回国際セミナー「文化的鏡像の諸相　地理－批評学／文学の考察　日本とヨーロッパ（Culture allo specchio: Studi di geocritica e letteratura tra il Giappone e l'Europa）」で、「ペレラからトトへ—20世紀イタリア文化における笑いの諸相（Da Perelà a Totò: Sulle forme del comico nella cultura italiana del Novecento）」と題した研究発表をおこなった。

<u>今後の課題・問題点</u>

今後の第一の課題としては、共同学位授与制度に引き続き則り、博士論文を継続して作成し、完成させることが挙げられる。

その他の問題点としては、特に、①学術レベルで通用する言語能力の習得、②口頭表現能力の養成、③具体的成果提出が挙げられる。第一の点に関しては、今回の派遣期間中の論文作成を含む学術活動を通じて研鑽に努めているが、今後もたゆまず向上に努めていく必要があると考える。第二の点もまた、伝統的に口頭表現能力が重視されるイタリアに関わり活動をおこなっていく以上、早急な改善が望まれる点である。最後に、第三の点に関しては、今派遣期間中は博士論文作成作業を最優先しておこなったために、その他の場での成果発表の機会を有効に活用できなかったことが悔やまれるために、今後はより積極的にそうしたチャンスを活かしていきたいと考えている。以上の反省を踏まえ、今後、意識してこれら問題点の改善に取り組んでゆくつもりである。